

自彊前進

NO. 17 平成30年3月2日（金）
附属新潟中学校 学校だより

※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと（校歌3番の文言から）

はなむけの言葉

校長 柳沼 宏寿

厳しい冬の寒さもようやく和らぎ、雪解けの水の音が春の訪れを感じさせる今日のよき日に、新潟大学教育学部附属新潟中学校第70回卒業証書授与式を挙行できますことは、この上ない喜びです。本日もご列席の保護者のみなさまにおかれましては、義務教育の年限が終了するこの日を感じ無量の思いでお迎えのことと存じます。謹んでお慶び申し上げます。また、この3年間、附属学校としての本校の教育に深いご理解と多大なるご協力をいただきましたことにも改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

そして本日、新潟大学教育学部学部長柴田透様、父母教師会会長佐藤久栄様、並びにご来賓の皆様方には、ご多用のところご臨席賜りまして誠にありがとうございます。卒業生及び教職員に代わりまして心より御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん。ご卒業おめでとうございます。

本校は国立大学の附属学校として、全国の教育の先導的な役割を担うという特別な使命を持っていますが、そのような中で、みなさんは3年間よく頑張ってきました。教育研究発表会では、全国から集まる先生方に、これからの時代に求められる学びについて身をもって発信してくれました。そして、ときわ体育祭、すなやま完歩大会、音楽のつどい、演劇発表会、東京班別学習、台湾の旅、等々、あらゆる学校行事において時間をかけて検討と準備を積み重ね成功に導いてきました。その他にも、学校生活を改善するために本質的な議論を展開してきた生徒会活動や、限られた時間と場所で最大限の成果を残した部活動など、あらゆる活動での取り組みを日々の授業につなげながら確かな力を身につけてきたと感じています。とりわけ、今年度は創立70周年という、本校の歴史において大変重要な節目の年でありました。記念式典をはじめ、全ての行事に内外から注目が集まりましたが、みなさんは、最高学年としてのリーダーシップを発揮し、堂々と附中生らしさを見せてくれました。多くの先輩方が、みなさんの姿を見て、これまでの伝統が連綿と受け継がれていることを喜んで下さいました。改めて、みなさんの真摯な取り組みに対し、敬意と感謝の意を表したいと思います。

一方で、「附中生」というイメージに息苦しさを感じたこともあったのではないのでしょうか。「できて当たり前」と思われがちですが、皆さん一人一人、普通の中学生であり、思春期の只中で、悩みもあればコンプレックスを抱くこともあったでしょう。そのような中、人知れず人並み以上の努力を積み重ねていたことを伺っています。また、現在の教育改革の中で目指されている「主体的・対話的」という学びについても、みなさんは自然体でこなしているように見えたのですが、実際は、異なる意見や対立する考え方に折り合いをつけることは容易ではなく、幾度も立ち止まり、時には涙も流していたことも伺いました。それでもみなさんは正面から立ち向かい、妥協することなく乗り越えてきまし

た。なぜ、そのように頑張れたのでしょうか。おそらく皆さんも感じていることと思いますが、それはやはり仲間や先生の存在があったからではないのでしょうか。最初は誰もが未熟で脆弱なものです。でも、志を共にした仲間がいることで勇気が湧き、互いに切磋琢磨することを通して、しなやかでたくましい力を身につけることができたのだと思います。そして、皆さんを温かい眼差しで受け止め支えてきた担任の先生をはじめ、全ての先生方の存在があったことも忘れてはなりません。「あたりまえ」のように見えるまでの、一人一人の力を育ててきたのが「附属」の環境であり、それが「附属の文化」なのだと思います。

ところで、附属新潟中学校の70年の歩みは、戦後の日本の歩みでもあります。敗戦を通して、私たちは民主主義の時代を生きることができるようになりました。しかしながら、グローバル化と共に、国際社会においては国や宗教上の対立から新たな紛争も生じています。私たちも戦争というものに無関心でいることはできません。

ここで、藤田嗣治という画家についてお話ししたいと思います。藤田は、「乳白色の肌」が美しい女性像で知られ、シャガールやモディリアーニらと共にフランスの一時代を飾った「エコール・ド・パリ」の代表的な画家です。その藤田は、日本に帰国してから従軍画家となり、戦意高揚のためのいわゆる「戦争画」を描きました。しかし、終戦後、彼は「戦犯」扱いを受けることとなります。特に美術界からは、画家としてのプライドを捨て私利私欲に走ったと徹底的に批判され、その後フランスへ帰化して日本へ戻ることはありませんでした。藤田は、当時戦争画を描いたことについて「日本は我等の日本であって、我等が守らなければならぬと思った」と述べています。みなさんは、もし自分が同じ立場に立ったとしたらどう

するでしょうか。体制下で求められる役割に従事しますか。それとも、平和を主張して体制に従うことを拒否しますか。もちろん二者択一のような単純な問題ではなく、アンビバレンスな状況、つまり相反する考えが重複する中で生きていくしか道はないのかもしれない。今、改めて藤田の作品を見ると、例えば「アッツ島玉砕」などは、巨大なキャンパスに日本兵とアメリカ兵が入り乱れて重なるように描かれ、戦場の臨場感が伝わってくるものとなっていて、それは、戦意を高揚させるというよりも戦争の悲惨さを伝えているようにも思われてきます。あの当時、この絵に向き合った人々が、自分の感じ方に正直に作品を読み解き、他者と自由に議論できる環境があったならと思ってしまう。世界の平和を実現することはそうたやすいことではないと思いますが、「自主独立・協同」を掲げながら、仲間と共に議論し、支え合って学校の文化を創り上げてきた経験は、必ずや皆さんの礎となることでしょう。時代を担うリーダーとして、この附属中で培った資質を最大限に生かし、世界が当面する課題に果敢に立ち向かっていただきたいと思います。

最後になりますが、義務教育の終了という人生の大きな門出に際し、これまでみなさんを支えてくださったご両親をはじめ、お世話になった方々への感謝の気持ちを忘れず、自分の新たな道を歩んでいただきたいと思います。どうか限りなく大きく羽ばたいて行って下さい。期待しています。

以上、卒業生のみなさんの前途に幸多きことを祈念して「はなむけの言葉」といたします。



※イラストby教頭

